

砂の器

映画文学人生論

原作：松本清張 (1960-1961年) 「読売新聞」 「光文社」
監督：野村芳太郎 (1974年) 脚本：橋本忍 山田洋次
出演：今西栄太郎 丹波哲郎 撮影：川又昂
和賀英良 加藤剛 音楽：芥川也寸志
田所佐知子 山口果林 作曲：菅野光亮
本浦千代吉 加藤嘉

幸せなんてものがこの世の中にあるのかい

松本清張『砂の器』を私は発売直後に読んだ。

野村芳太郎監督の映画も公開直後に観た。ベストセラーなど話題作への反応の鈍い私にとっては珍しいことで、原作、映画とも世に出た直後にとびついた例は他にはないと思う。

原作は東京の蒲田操車場内で起きた殺人事件の真犯人を追う推理小説。警察の聞き込み調査によれば、蒲田駅近くのトリスバーで東北訛りのズーゾー弁の男が連れれの男と「カメラ」を話題にしていたという。被害者はズーゾー弁の男だ。

そこで、警察は秋田県の羽後亀田駅周辺を調べるが、手がかりは見つからない。そのうち逆方向の出雲にズーゾー弁に似た方言を使用する地域が存在し、木次線の「亀嵩」（カメダケ）という駅名があることが判明した。つまり、犯人と被害者が蒲田のバーで話題にしていたのは「亀田」ではなく「亀嵩」の可能性がある。

原作をはじめて読んだときは、このように方言の類似性に着目した知的な要素を面白いと思ったが、映画は趣が違う。犯人の天才作曲家和賀英良（加藤剛）がコンサート会場でピアノ協奏曲「宿命」の指揮をとりながら回想するシーンで感動させられた。少年時代にハンセン氏病の父親と放浪し、石を投げられたり、からわれたりした少年が成長して一流の作曲家となり、晴れの舞台上で指揮をとる。その栄光の瞬間に刑事が逮捕状をもって



砂の器——映画文学人生論

コンサート会場へやってくるというドラマだ。

しかし、映画館では感動して涙が出た私も今回DVDで観ると、涙は出なかった。病父と放浪した子供が苦学して出世し、日本でいちばん期待される音楽家となって、後援会長の前大蔵大臣の娘と婚約するというのは話がうますぎる。しかも、別につきあっている愛人に墮胎をすすめたり、昔の恩人を殺害し、「幸せなんてこの世にあるのかい」と言うのは作為の手口が見え透いている。

などと理屈ではは思うものの。不思議なことにしらけた気分にはならなかった。DVDで二度目に観た時もやはりそれなりに感動した。この映画には理性ではなく、情緒に訴える力がある。

原作者の松本清張は「小説では書けない。映画でなければ表現できない。すごい」とこの構成を評価したという。もともと原作も作り話である。あらためて読み直してみると、そんな馬鹿なと思うような不自然なところがある。

嘘っぽい不自然さでは原作よりもひどい映画が観客を感動させるのはなぜだろう。芥川也寸志と管野光亮がつくった音楽や川又昂が撮った日本の四季を背景として海辺や山村をさすらう親子の旅の映像が絶妙の効果をあげているためか。それとも原作者や脚本家や監督の父と子の「宿命」が映画の中に織り込まれているからだろうか。

宿命の波に崩れる砂の城